

カッパ塾 第2期

第2回例会

「脇山の福岡農士学校と早良の農業について」

講師：青柳 正彦氏

講義記録

写真資料

「農士学校の沿革」

日時：2011年（平成22年）10月28日（土）10時～12時

会場：入部公民館

カップ塾 第2期

第2回例会 日時：2011年（平成22年）10月28日（土）10時～12時

会場：入部公民館

内容：「脇山農士学校と早良の農業について」

講師：青柳 正彦（あおやぎ まさひこ）氏

（重留在住、脇山にあった「福岡農士学校」卒業）

<講師プロフィール紹介>（林道生さんより、要点のみ）

重留在住。昭和2年生まれ、入部小学校、糸島中学校を卒業。

6人兄弟。当然志願して戦争へとおもっていた。終戦で、精神的空白。親から農士学校へ行けということで行った。県の農業改良普及員として昭和63年3月で停年退職。福岡市、古賀市、糟屋郡各町、久留米市などで働く。昭和63年3月、町内会長、連合会長までされた。

<主宰者挨拶>（玉井輝大より）

カップ塾は、早良の生き様を歴史と自然から学んでいこうということでやっていっています。「農士学校」という言葉を聞いて、一度その話を聞いてみたいと思っていました。私が住んでいる重留の町内で青柳正彦先生が、農士学校の卒業生で資料もお持ちだということ。「ふるさと早良会」と共催で今回やっています。

資料は、青柳サンからいただいた学校に関する「写真資料」と、「農士学校の沿革」と書いた資料。その5ページまでは青柳先生から頂いたもので、残りは、ネットで私が調べた資料で農士学校の創立にかかわった安岡正篤氏、佐藤慶太郎氏の資料となっています。

<青柳正彦さんの話>

重留の青柳です。脇山にあった農士学校とはどういう学校だったのか、どうなったのか、と、玉井さんから幾つかの質問項目をもらいました。その質問を基に「農士学校の沿革」をまとめ、本日は農士学校の話を行います。

昭和20年の終戦の年に中学をでて、その年の1月から、ずっと九州兵器糸島工場で動員をかけられていました。卒業しても通っていたのですが、8月15日に終戦を迎えました。前原の日向峠を越したところ、昔の怡土村の井原に姉がいました。そこらから、工場に歩いて通って行っていました。終戦の翌日に、うちにあった刀だけは折って帰宅しろと、義兄にいわれ、刃先だけ持って、日向峠を通過して、歩いて家に帰りました。日向峠にはもう兵隊さんの姿もなく、開墾したところのトマトが枯れて、赤いトマトの実がぶら下がって哀れな姿でした。私も虚しくなって、なんのために、平安神宮まで行って特別幹部候補生に、せっかく操縦でパスしたのに、と思いました。

終戦になるまで入隊命令が無く、どうしてかなあと思っていました。早い人は4日以内に入隊と言われていたのですが。全然音沙汰がない。飛行機がなかったのですね。召集の方が来ると思っていたのですが。終戦になって、本当に虚しくなって、家でボーっとしていた。そういう姿を見てでしょう、父が、「お前、農士学校に入れ」と命令を受けました。

それで、翌年の21年4月に農士学校へ入りました。本科1年限りの学校だと思って初めて知りました。で、1年終わって、2年目。父が「まだ帰ってきたらいいかん」ということなので、研究科ということで、1人また、学校に残りました。で、2年目の4月、5月は、寮生活で就寝前に、仏壇の前で、研究生は私ひとりですから、私が般若心経を唱えまして、14名入ってきた本科生が後をつけて、お経を上げるといようなことを日課でやっていました。4月と5月とやったのですが、何かもっと少し違ったことを

したいと思っていました。

椎原と荒谷の中間の右手、西側に、丘のような山があります。竹尾農場といって学校の茶園があり、そこに、トタン葺きのランプで井戸のない小屋がありまして、そこに住んで、7ヶ月間一人で茶園の管理等をやりました。晴耕雨読でした。

8ページの右の上の段の写真です。小屋が一軒見えます。これがお茶園で、これがさらに倍ぐらい下までありました。それから、椎原の上の山林に連なります。農場の上は荒谷の集落になります。その下が、椎場の集落です。とにかく、人の顔一つも見らんで。電気もなく、ランプで、井戸もない。米を2俵持って、味噌と梅干しと塩としょうゆと馬車に積んで行きました。6月から入山して年末になって、学校の方から校長で二等兵で招集された菰田先生が、シベリアから復員されるので降りてこいとの指示があり、学校に戻りました。菰田校長からは3ヶ月の薫陶を受け、3月に卒業しました。

卒業と同時に、入部農協に技術員で就職しました。2年しまして、県の農業改良普及員を38年間やってきました。農協の2年間も入れて40年間農業の仕事をしてきました。私は農業なんて考えてもみなかった男でございますが。農士学校の一人の先生の薫陶で、松下村塾の人が吉田松陰を崇拝したのと同じように、私も先生を尊敬しました。そして、農の道を志したわけです。そして、農業が生涯の天職となった。教育とは恐ろしいもんだとつくづく思います。

7ヶ月の山ごもりを合わせて、2カ年過ごしたわけです。そして、学生だった分際で、農士学校の毀誉褒貶、栄枯盛衰を踏み込んで説明することは難しいと思いますが、又、学生でしたので大した資料はないのですが、それを使いながら、説明したいと思います。忘れ去られようとしている農士学校について、この席を設けられましたこと卒業生として、本日ここに集まれた皆さま方に感謝いたします。

農士学校の正式名称は「福岡農士学校」ということで昭和6年6月に創設されました。それが、昭和21年6月に財団法人九州農士学校と名前が変わる。終戦になって、行政の体制が変わって、それまでと同じようにはいかなかった。

創立は、時の県知事松本学さんの時に、酒井忠正さんの援助で埼玉に「金鶏学院」を設立し「日本農士学校」を創設した安岡正篤氏と、若松で石炭で財をなした佐藤慶太郎氏と麻生太吉氏、この方も麻生炭鉱で、吉田茂の娘婿が長男の太賀吉さんで、その息子が麻生太郎、これらの方々が、相当苦勞されてつくられた。

金鶏学院の安岡先生が見込まれた伊藤角一さんが学監として着任された。一年たって、春に最初に9人の入学者がいました。名簿を見ると石津新四郎という名前が出てきます。この人は、脇山の野田の石津家の嫡男と思われます。後に紅葉八幡（光雲神社？）の宮司になりました。昭和の主基斎田の大田主（おおたぬし）で、新四郎氏は一期生。

創立の昭和6年から昭和21年、そこまでが農士学校の本来の姿ではなかったか、と思います。私は昭和21年4月入学で、そのころは、財政と食糧難から、少し農業の方に比重がかかってきていました。それまでは、親方日の丸のような風で、羽織袴と高下駄で颯爽と脇山あたりを歩き回っていた。地元の方に少し反感を持たれていたのではないかと思います。昭和21年までは、初代の松本学さんから、ずっと歴代の福岡県知事が代表者、いわゆる校長をやられていました。

昭和20年の終戦を迎えて、社会党の知事になり、知事に校長を引き受けてもらえなくなる。そして、財界から安川第五郎氏が会長として、第一次後援会が形成されました。昭和21年には財団法人に移行し「九州農士学校」と名前も変わりました。「福岡農士学校」の看板が外れて、白木の大きな看板が「九州農士学校」と変わったのを私も見ました。全国から生徒が来ているのだから、福岡より、九州の方が広うなって、よかたいと個人的には思っていました。

昭和28年、糸島の方に本校が移転しました。脇山には22年間、糸島に行って10年して閉校になりま

した。福岡農士学校はみんなが骨折って建てられ、それも、主基斎田がつくられた場所に建てられたのに、それを糸島に持っていくということで、だいぶ悩んだと思います。昭和22年5月24日から、昭和23年3月10日までの、わずか10ヵ月の片山政権で、耕作面積が小さくなりました。農地開放改革です。その後、すぐに保守になって、芦田均、吉田茂、鳩山一郎と続くわけです。

農地改革が断行されて、農士学校の水田は3町歩あったのですが、6反に減った。6反というのは、昭和21年では、1反で5俵しか取れなかった。頑張って作ったとしても6俵。だから6反では36俵しか採れない。その当時、農家の保有米は一人3俵でした。農士学校では少なく見積もって2俵、30人食べさせて、60俵。その半分ぐらいしか採れない面積になってしまいました。ここが、糸島に行った一番の原因です。

糸島の方は、西鉄の農場で、7町歩あった。6反と7町歩では、雲泥の差がある。私も一回行きましたが、全部水田ではありません。長糸に近いところで雷山校区にありました。丘の少し高いところには、温州ミカンを植えていた。それから、畜産、養鶏。畜産はブタが多かった。そして、養鶏、園芸はほとんど野菜でした。

脇山では6反に減られ、米が無く、畑はやっていましたが、芋ばかり食べるわけにいかないの、役場に行って特別配給米というのをお願いにっていました。「いまだき、寄宿舎を置いているような学校は日本中ありません。」特別配給米をください、といったような言い方で、お願いにっていました。ここらが、羽織、袴、高下駄で、風を切って歩くような農士学校の風潮に反感があったのかもしれませんが。こういうことが一番強く農士学校の思い出に残ることです。主基斎田のある地元に3町歩の農地を持つ学校がある。という事が魅力的だったと思います。

ただ手をこまねいて糸島に移った訳ではなく。顧問を中心に、酪農に取り組もうということで、麻生多賀吉さんが嘉穂郡の嘉と麻生の麻の、嘉麻牧場をやっていました。そこから牛乳を頂いていました。脇山でも酪農をやりました。村の青年を集めて、脇山酪農組合を結成して、校長が組合長になっていました。500頭に脇山の乳牛をふやして、7千本の牛乳を福岡市に出荷していました。

もう一つ現金収入を得る道として、やはり麻生さんが動いて、木毛（モクモウ）をやりました。脇山は山が多い。それで木毛を始めた。木毛の製造機械を手に入れたけど、しかし、技術者がいない。私の時に先生で居られた福元三郎先生は、私が卒業した後、一度は鹿児島島の里に帰って、木工所をやっていたのですが、先生に学校の事情を話して、帰ってきてもらって、木工の指導をお願いした。そのころ脇山小学校から谷口へ行く県道から、農士学校へ入ると、すぐ左側に、木工所がありました。高さ50cm程度の棚を作って、木毛を乗せて乾かしていたことを見ることがあります。しかし、雨が降り、取り込むのが遅れたら、松材ですから、蔭酸（シュウサン）を含んでいるから、蔭酸が土にしみ込んでいたようです。木毛をやめた後、野菜を作ったらなにもできないようになっていたようです。

酪農と木毛のような、商売人がするような、とにかく金を得るためのことをやっていた。その事情はよく解ります。あれだけの、農士学校ですから。詩吟をして、座禅をして、青年の元気がいい歌を歌いながら、神道夢想流丈術やらやっていた。ところが金策が尽きてから。数年間とにかく学校を支える資金が欠乏した。主食がない、食べる米の半分しかとれないのですからね。

しかし、20名ぐらいの生徒と先生たちの人数減らすわけには行かない。雷山校区の前原東の西鉄の土地、7町歩の所へ移転した。水田と畜産もあった。これで自給自足は十分できました。九電から寄託されていた農業電化中央試験農場として認可され、農村電化のモデル農場をつくるためにかなりの寄付を九電からもらっていた。それで、もう大丈夫ということで、20数年間やっていた菰田校長が若い頃からの夢だった愛媛の郷里へ帰られました。この方がもっといらっしゃったら、酪農と木毛、神道夢想流丈術も残ったのではなかったかと思います。

昭和32年から、佐藤篤次郎氏を理事長、安川第五郎氏を会長として第二次後援会を結成することにな

りました。糸島に行って 10 年たって、東京オリンピックの年の昭和 39 年 11 月に解散しました。このようにして農士学校は創立から 33 年の歴史を閉じたわけです。

話は以前に戻りますが、学生に関しては、青森から沖縄までいました。私の時に青森の津軽から、りんごをたくさん作っている農家から来ていた学生、高木君がいた。正月だけは帰れたのですが、彼は青森に帰らなかったのが我が家につれてきたことがあります。姉が雑煮を作って食べさせたんですが、姉が笑っていた。お椀に餅がひっつかないように下に敷いていたダイコンまで食べてしまった。食べないと失礼になると思ったのでしょう。豪傑だった。鳥取、淡路島。鹿児島島の佐多岬の糖分の高いミカンを作る農家の友人、新燃え岳の宮の城町で、海軍兵学校を出た友人もいた。そんな風にあちこちから来ていました。学生の総数が 256 名、33 年間ですが学生の卒業は 31 年回ですので、平均で 8 名程度になります。一番最後の糸島の時の卒業生は 1 人。多い時で 20 名、少ない時は 3 人。私がいた 20 年から 21 年は、研究生 3 人、私たち本科生が 12 名入学して、全部で 15 名。私が一人残って、本科生が 13 名入ってきて 14 名です。大体多い時で 10 名～12 名ぐらい入学していたのではないかと思います。どういう手づるで入学してたかはわかりません。

とにかく生徒には何も知らせなかった。福岡農士学校が九州農士学校に変わったことも、生徒もどうしてですかとは聞かなかったし、何も教えてくれなかった。いまになって、県知事が校長になってくれなくなって、そこで体制が変わって、助成金も来なくなったのだな、それで、経済力のある方々に理事長になってもらったけど、それじゃいかんということで、酪農をしたり木毛をしたりしたのだな、などと思っています。

ある時、青柳君は福岡市のことは、よう知つとろ、ということで、2、3 人つれて、名島に粉碎機をもらいに行かされたことがあります。車力（シャリキ）を引いて名島までもらいに行きました。重たかったですね、高さ 1 斗ぐらいで枡がついていた。1 斗 5～7 升は入ったのではと思われる大きさ。にぎりめし 1、2 個はもらって食べたんですが、練堀町、城南線のあの坂を引っ張り上げて、重たかったですね。脇山まで持っていきました。着くとすぐに小麦をいれて粉碎して、メリケン粉をとるのかと思ったら、そうでもない、もうそのまま。小麦のカスはフスマといって、私も養鶏したことがあるのですが、酪農家が使う家畜の餌なんです。炊事のおばさんが、ふるいでふるって、そのままふかして。美味しかったですね。とにかくひもじかった。雑炊一杯と梅干し一つで働かんといかんかった。若さといのは耐えるもんですね。昼と夕食は普通のご飯ですが、まあ、麦は入っていましたが。朝は、よう考えますと、終戦になって、雑炊で米を少なく使うようになっていました。

牛と馬がいました。大きな鍋に、餌の藁の他に混ぜる芋も、食べられない筋のようなのを混ぜていたのですが、その中でも少し太いところを、冷たいべとべとする餌の中から、引っ張り出して、前の小川ですすいで土手の陰で食べたりしていた。とにかく、ひもじかったですね。

寮はあります。寮がなかったら活動できなかった。「写真資料」の 1 ページの左の写真が、主基斎田の方から見た写真で、中央右の藁葺きの家屋が主基斎田の時の社務所。その右手が主基斎田を耕す時に使った家畜を飼っていたところ。真ん中の道が山に登っていく道。写真下の一番左、ここが大きな収納舎、その隣が堆肥舎、この陰が宿舎になっています。この山をずっと登ると右上に見えているのが本堂ですね。2 ページの写真で、これが農士学校の門で、昔は楽しかったですね。掟というのがありました。門の横に看板があった。「寸陰を愛せざるもの／天地を敬せざるもの／恥を知らぬもの、／右の者この山中にはいることを禁ず。愛日道場」。ちょっとやかましか標札が立つとります。

3 ページの写真が山上の愛日神社から撮ったもので、鳥居も見えますが。向こうの大きな屋根が講堂、手前が寮、ちょっと突き出たところが客間。奥の方に学校の事務所。朝の起床は、5 ページ右上の太鼓

で、知らされました。左上の写真の階段の上に愛日神社がありました。これが大祓（おおはらえ）の写真。私たちは受けてません。6 ページ目の右上は丈術。こんなことやってたんですね。7 ページの右上の写真は法螺貝を吹いているところです。朝起きるのは太鼓で1 年中5 時ですが、昼食の合図は、昼はホラ貝でやっていました。これは畑に入っている時に吹いてました。7 ページ右下の写真は大きな収納舎です。その左の写真をみると、真ん中に写っている谷口へ行く道から下全部が畑で、野菜をつくってました。ここが学校から下りた低いところで、ホラ貝が十分聞こえてました。それが昼食の合図でした。野菜畑一帯が野中農場です。

8 ページの写真は、竹尾農場は説明しましたが、その左側が学校から主基斎田の見晴らしです。まっすぐ直線で主基斎田が見通せます。この手前側に矩形で黒い線が見えるのが刈り込まれたお茶で。このお茶の囲いの中で献上米が作られていました。その下の写真が早乙女、娘さん達が着物姿で田植えをしている姿です。9 ページの右上が愛日神社。大体「写真資料」の説明はこの程度です。

次に、なんで農士学校が脇山にできたかについてです。「農士学校の沿革」では「亀朴の占いで福岡県となった昭和御大典の大嘗祭主基斎田縁の地として」と書いてますが、これは松本知事とか、金鷄学園の安岡正篤先生とかの強い薦めで主基斎田がある脇山にということになったと思います。天皇が即位される大嘗祭の時は献上米が用意されます。悠紀斎田と主基斎田をどこかに作らなければならない。どこにするかを亀朴の占いで、亀の甲羅を焼いて干割（ヒワ）れた先に該当する所で決める。それで福岡県が昭和の時は選ばれた。悠紀（ユキ）斎田は埼玉県（滋賀県野洲市？）だと思います。福岡県でどこに持っていくかということになって、土壌風土などいろいろ条件があると思いますが、とにかく献上米ですから、汚物が流れ込むところはダメ。きれいな水の所。収量などは問題ではなかった。全部を食べてしまうわけではない。話を聞くと手袋してマスクしてピンセットでまずいものは除けて、扱っていたと聞いています。

農士学校でどういう教育を行っていたかというのと、「文武農一如。知、行、徳、具足の青年を養成、以て農村の振興を期す」これだけです。「具足」というのは「十分に備わっている」ということ。昔、武将の命を守る武具が足りているという意味から、「具足」とは、「十分に備わっている」ということになっています。知は知識、行は行動力・実行力、徳は道德の三つが備わっている青年を鍛え上げるということが理念になっています。

職員については、「農士学校の沿革」に書いているのは、名簿がありましたので、開校から終わるまでに携わった人たち全部を書いています。「写真資料」最初の写真の伊藤角一さんは最初の学監として赴任された人です。その後、学監としては、私が申し上げてきました菰田さん、そして、私が入学した時は西坂経孝（ツネタカ）さんでした。菰田さんと同じ愛媛県から来られた方でした。あとで私の卒業まで3 ヶ月の時に、二等兵で出征されていた菰田さんが校長で戻られました。

二番目の教授のところの、右から2 人目の桑原東さん。この方は唐津からこられた方で、この方が私を農業に向きを変えたさせた。それから、みんな通勤をしてある人はいない。一人だけ、助教というとこの左から4 番目の結城清さん。この方は脇山きっての篤農家で、立派な人でした。門戸口の購買店のちょっと横道の所に自宅。今は、谷口の集落に息子さんの家があるそうです。この方が通勤してあった。しかし、上にあがって見えることはなく、いつも下で午後の作業の時間になったときにちゃんとおられました。大体園芸を教えてあった。普通作物と、稲の作り方も教えてありました。そういうものの苗からの作り方を教えてもらいました。（玉井：今の脇山の自治連合会会長のお父様ではないかと思います。今回のカップ塾にご案内したところ、別件があつて参加できないけど、お父様が農士学校で働いていたとおっしゃってありました。）

具体的な教育内容についてですが、「師弟起居を共にしての塾教育」です。明德寮が矩形でありました。真ん中に高い壁があって、周囲が全部廊下でした。北と南に6畳ずつの部屋が間仕切られて、そこに生徒が3人ずつ入っていました。北側の一番東側の大部屋には仏壇もありました。西側に8畳の客間がありまして、その横の二間（フタマ）が妻帯者の先生が住んでました。学監の家もありました。「写真資料」4ページの上のこのささやかな一戸建て、三楽居が学監（校長）の家。下の登りたての左側わらぶき屋根、含真荘に、常時、武道の先生が住んであった。あとは全部、朝5時に叩かれる太鼓と一緒に寮に住んでいました。

5時の太鼓で起きますと、すぐ素足で講堂の裏の大きな丸太ん棒が2本立っているところへ、木剣を寮からもって走っていくのです。そして、剣道の切り返しを10回ずつやって、20回ほど棒に力一杯打ちかける。そして終わったら木剣をおいて、また、走って、寮の東側の風呂場の横の流しで歯を磨いて、顔を洗って、それから部屋に戻ってました。

文武農ということでしたが、文ということでは、昔はこれが浸透しておったと思うのですが、四書五経には、論語、孟子、中庸、大学とありますが、論語しか読んだことはなかった。阿弥陀経のように、孔子さんが言われてたことを弟子がまとめていったものです。紀元前551年、そのころの周の国で大臣までなった方で、国士（コクシ）に挑戦するようなこともやったのですが、途中官吏のねたまのため上にあがらなかったのが、嫌気がさした。挑戦をやめて、子路（シロ）という暴力団の団長のような弟子を連れて、中国中を名君を探して周遊された。孔子はいつも一所にとどまっていなかったから、「孔席暖まらず」という言葉もできたそうです。孔子が主張したのは儒教の「仁」を根本の思想とするということです。仁というのは日本人でも大事なことでと分かりますが。医は仁術なりという仁のもある。口で言って説いて教育する仁もあれば、医学の技術で人の命を助けるのも仁術だと。

「農士学校の沿革」に書きました職員名簿の先生方、それぞれの分担で講義は講堂で行われていたのですが、時々、来賓が見えたりしました。錚々たる人がみえたと講堂か、寮の客間に集められまして、いろいろ話を聞きました。農学、栽培技術、農業経営などについて。安岡先生は私が学校にいる時だけでも2回は見えました。農学で四国へ2回ぐらい視察に行った時、農協に入って、とにかく安岡先生を私は4、5回ぐらい見ました。色紙にも書いてもらいました。大事にしています。

農業経営は栃木県で講義を受けました。このときは、このひとはやはり、哲学者、人生を達観したような人でした。何もなくてもとにかく植えるものがないことはない、にわとり、肉を食らうこと、大根を食うが如し。普通、そういう講話を聞きに行きました。大きなノコで大きな木を横に真半分に切って、大きな梁木（ハリキ）を作っていた。

そのほか、日本一を取りました、稲の12俵（反当たり）ですか、長野県佐久郡、島崎藤村の旅情の詞、佐久の草笛のところへ行きました。見物人が多いのですね。奥さんにご飯を炊いてもらって。とにかく、博多駅から普通列車の各駅停車で、名古屋で下りて、又、松本で下り、真四角のバスに乗って、千曲川沿いの道を上田で下りて時々アアラレの降る中を寒さと空腹をこらえて米作多収日本一の黒澤さんの家まで歩いた。とにかく、名古屋駅までにぎりめし2つで、立って行った。もう本当に、みんな普通の弁当を食べているのに。あの時が、一番つらい旅行でした。

武の方は、丈術（ジョウジュツ）は神道夢想流です。警備隊に入って、いまは警察の警棒となっていて「農士学校の沿革」では書いています。福岡市に玄洋社がありました。偉い人がいっぱいおられました。進藤一馬さんなんかも関係ありましたが、中野正剛さん、広田弘毅さんなど。そこに末永節さんという長老の方がいらっしゃった。彼は中国に行ったりして、孫文さんと親しかったりする人です。こ

の人が丈術を始めた。とにかくこれを警視庁の特別警備隊に導入させ、それがいま警棒になっております。「写真資料」の写真では長いのもあります。菰田校長さんも日本武道会から5段の免状を持っていました。千代町にこの丈術の道場があつてそこから、乙藤さん、高山さんの二人に来てもらっていたらしい。こういうので昔は鍛えられていたけど、私たちは一回も教えられていません。乙藤先生はおられたけど、体調が悪かった。

農業関係は、これはかなり増産の力になりました。「写真資料」7ページ左上の広田農場が、水稻と麦作。これが3町から6反になった。7ページの下の方の野中農場は先程述べましたように、ここは畑で、ほとんど野菜。ここで野菜のいろんな種類の栽培技術を教えてもらいました。それから8ページ右上の竹尾農場、丘で広い茶園でした。そこで私は7ヵ月一人で過ごしたのですが、お茶の他に栗園もありました。栗盗人（ぬすっと）が入って、かます（藁むしろを二つ折りにして作った袋）に栗を詰め込んで、置いておりました。犯人はわかりません。そのまま収得しました。栗園は手入れが悪く、てんとう虫（ばえ）（鳥などが落とした種から自然に植物が生えること）の雑木がどんどん生えて、藪のようになっていたので。全部、鉈（なた）一本で切ってしまいました。そして、それを燃やして出た灰が、かます3俵ありました。相当な量でした。それは肥料になりました。

そういう風なことをしながら、夏になりました。2回ほど、いま涼山泊があるところの上の橋のところで少し深みがあったのでそこで体を洗いに去了。

これで、一応の質問に対する回答をしたつもりです。

あとは、閉校した後にどんな風に施設などがなっていたかについてですが、「農士学校の沿革」4ページに資料があります。最後の理事長さんである赤羽善治さんの書で「九州農士学校址」という記念碑が講堂の一番邪魔にならないところに、一段高くなった藪の前に、大事に置いてあります。昭和39年11月吉日として書いてあります。この時は私も参加しました。記念碑は二つあります。二つ目は「九州農士学校跡地」というので、糸島の西鉄から払い下げられた土地で、後に九電に引き取ってもらったところです。「早良区より前原東に移転。昭和28年5月 解散は昭和39年11月」とあります。

それから、農士学校の講堂はケヤキづくりの立派な建物だったからでしょう、東入部平尾の西教寺さんの本堂となっております。同窓会の際は博多駅にバスが迎えに来て、とりあえず（早良）平尾で下ろして、バスに待ってもらって、その本堂で物故者の法要を毎回やっておりました。それからそのバスで会場に行って、同窓会をやっておりました。

学校は昭和6年6月に建ちましたが2年遅れで昭和8年10月19日に、同窓会を愛日同窓会として結成しました。平成19年11月16日、私も参加したのですが、脇山の涼山泊で解散総会をしました。この時の余り金で、先ほど申し上げた碑を建てようということになった次第でございます。農士学校は昭和39年に解散したけれども、同窓会はそのあと42年間ありました。結局74年間は同窓会をやったということでございます。解散当日は12名ぐらいしか集まりませんでした。私の同期の海軍兵学校に行った中原君が鹿児島から来てました。菰田校長の息子さん夫婦も愛媛から来られました。そして、碑を残して解散することになりました。

安岡正篤先生に関して少し話しますと、歴代の首相の殆どの方が教えを受けたという方で、終戦詔書の刪修（さんしゅう）者ということです。調べると「刪修（さんしゅう）」とはより良きものに仕上げる意味だそうです。天皇が読まれる詔書で、負けたことがない日本国民に対して負けたことを伝える言葉をより良く仕上げるのは当然のことです。どこがいかにもかということ「耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍び もって万民の為に太平を開かんと欲す（ホッス）」 こういう語句は、確かに安岡先生が刪修

したものであると思います。その時先生は49歳とばりばりの時。それから「平成」の年号に関しては、書経と史記から取った言葉です。天皇が崩御されたのが昭和64年1月7日。崩御の8時間後に官房長官の小渕さんが発表された。安岡先生は昭和58年に87歳で亡くなられています。しかし、天皇が亡くなられたら速やかに年号を出さねばならない。したがって、天皇が健康であっても、高齢になれば、どなたかに、相談して準備しておくことは当然だろうと思います。したがって、安岡先生が平成の年号づくりにかかわったと考えてもおかしくないと思います。識者の間でもそうだと言われている。それほどの方だったということです。

もう一つ、地元の林遠里翁に関してです。地元の人なんかに聞きますと、むかし馬立山というところに湯が出ておりました。そこに、百年祭の時の名簿をみますと、勸農社社員の2番目に高田耕作さんという方が出ていて、勸農社の高弟であることが分かる方がいらっしゃった。菰田先生が昭和23年に復員された時、「青柳君、あなたは足元に明治の三大老農の林遠里さんがおられたろうが。遠里さんの研究をしなさい。」と言われたことがありまして、なんか気にかかっておりました。その高田さんに会いまして、いろんな話を聞きました。帰りがけに風呂にはいっていきなさいと、いわっしゃるので。ずるずる温かい湯でした。

一つだけ言いますと、誘蛾灯も林遠里翁が作ったそうですが、それまでは大きな竹の先に格子をつくって、そこで火をつけて、脇山の田んぼの中をゆっくり回って蛾を誘って、そして、内野校区に入ったらぱっと火を消して、走って帰りよった、という話を聞き、びっくりしました。まあ、原始的で。苗床もまず田んぼをならして、周囲の畦からモミをどんどんまいていたそうです。それではなにも管理ができないということで、ちゃんと30cmの通路を造って、床を作ってその床に蒔くように改良した。とにかく、稲作に関しては何でもやったとのこと。それから、谷という集落がありますが、そこの大鶴源吉さんに頼んで杉・桧の根元の曲がったところをつかって、持たての鋤きの素材を創らせた。勸農社員を各県に派遣して水田の深耕に勉（ツト）め、稲の増収に貢献していった。

「農士学校の沿革」の5ページに、世間では翁を功績の高い農学者と呼ぶ人が多いので、敢えて、明治の三大老農 筑前の林遠里 翁と呼びたい。少なくとも翁の郷里の人々は皆んなこう呼んでもらいたい。老農とは、『老』を尊称とする300年の幕政から歴代の明治政府が日本農業の振興に特筆の尽力をされた三人の人々に贈った最大の感謝と敬意を表した尊称である。維新後、明治の政治に携わったのは殆どが元武士であり幕府の政治は老中が司った。幕末の危機を迎えては、老中の上に大老職までおいて対応したことからも『老』が特別な尊称であったことがわかる。「老」というのは、年寄りということではなく、最大の尊称だった。それをわざわざ3人にしか与えてないのに、林遠里翁を一農学者でとどめて欲しくない。農学者といえば横井時敬氏が明治から大正にかけて農業のリーダーといわれた人。終生農業教育の振興に命を捧げた人でした。初代の東京農業大学の学長。このひとでも農政経済学者としか言われていない。農学者だったら試験場でも大学でも農業関係で頑張っている人はみなさん農学者で掃く程います。老農はたった3人にしか与えられていない尊称、遠里翁はその中の筆頭（ヒットウ）です。せめて郷土の「ふるさと早良会」とか「カップ塾」とか思いを昔にはせる会には、地域の誇りとして扱って欲しい。そのために私は言っているのだから。

誤解がないように言いますが、時の政府が与えた3人の尊称ですが、時の政府というのは日清・日露を起こしたように、国力をつけるために働いた時期です。その時期と丁度、先生の稲作を中心に農村を豊かにすることが一致した。農村に米がうんとできて安心して戦争にいける。農村出の兵隊さんが一番強うございますから。そして、農村が豊かになることが、後顧（コウコ）の憂いなくなるのと、兵隊さんは安心して戦地に行けることなのです。それに貢献してくれた人に、時の政権は感謝しきれないということで、「老農」に「大」を付けて「三大老農」と呼ぶことになった

のです。そういうことでよろしく願いいたします。

<質問、意見交換>

(問) 門柱は、当時も今あるところにあったのですか？

(答) 門柱の場所は、現在地と谷口に行く道の両側に2本と2箇所だったと聞いています。

(問) 青柳さんは、農士学校を何年間で入学して、卒業されたのですか？

(答) 私は2カ年です。みんな1年で帰るのですが、23人いたのですが、全員帰りました。私だけ、私の父親が帰えらせませんでした。父は、炊事場にも入ってこん男でした。たくあんを出しても、くさいと言ってのけるし。とにかく30才近くで小学校の校長になって、そういう人は他にはおらんやったのでは。金武小学校でした。校歌も作って今も唱われております。四箇小路に「さかき」という料亭があります。青柳榮次郎作詞ということで、校歌が架かっています。「飯盛山は紫に」で始まる。

(問) 金武小学校の校歌をお父様が作られたのですか？

(答) その通りです。当初、久留米の方に赴任し、金武小学校、田隈小学校まで勤めました。その後、赤坂門の交差点にありました横浜海上火災に重役でおりました。支店に行かせられるようになって辞めまして、そしたら、村長さんが助役にということで、助役から村長を終戦までやっていました。レットバージで引っ張られましたが、別に悪いことはしとらんから。そういった父親でした。やかましかった。だから2年目は帰られませんでした。大体、入学まで農業など考えておりませんでした。期待していた長男が戦死しまして、姉が4人で私が家を取らんといかんので終戦のショックでメゲかかっていた私の精神を叩き直すためだったと思います。

(問) 卒業された方は、大半は農業をやられてあるのですか？

(答) 農業です。同級生では、りんご園したり、飼育牛をしたり、玖珠町でやっている友人からは良い粃が欲しいと問い合わせが来たりしてます。

(問) やはり、農業のリーダーに多くの方がなってあるのですか？ 農業に関するエリート教育を行っていたと思うので。

(答) 自営ですな。自営で地域振興に尽力した人が多いです。私が知っている人では、八女では素晴らしい方がいるようですね。

(問) 糸島に行って、糸島農士学校になったのでは？

(答) いや、九州農士学校です。この「写真資料」10ページ左上写真の書き方が悪い。「糸島」と「農士学校」の間をあげなければならない。

(問) 糸島の九州農士学校には記念碑も何もないのですか？

(答) いや、あります。「跡地」として、ある。(手持ちの写真を示された)

(問) 場所はどこですか？

(答) 前原東とだけ、聞いています。確認しなければと思っています。昔の一貴山です。

(問) 「農士学校の沿革」の2ページ中に、「校医」として、「玄橋玄理」とありますが、「広橋」

ではないでしょうか？ いまの先生が広橋玄正さんで、そのお父さんが「玄理」と聞いております。

（答）そうですね。訂正しなければならないが、大部分は玄理さんの時代です。玄正さんは私と同級生です。

（問）安岡さんがどうして、福岡の農士学校にかかわられているのですか？ どなたの紹介なんですかね？

（答）「農士学校の沿革」の6ページに経緯を書いています。畠山重忠という源義経の武将で強いのがおったでしょう。鶴越の逆落として馬を担いで下りたという。その埼玉の重忠の城趾に安岡先生が日本農士学校をつくられた。三井と住友が出資した。主基斎田のある福岡の知事と安岡先生で農士学校をつくられた。そして、福岡県知事の松本さんが福岡農士学校の初代の校長となられた。

福岡農士学校は中等学校出身者しか取らなかった。高等小学校や青年学校出の師弟あたりの教育機関をつくりたいという願が松本知事にはありました。自分が福岡農士学校の校長をしながら。それで、宗像に宗像塾という、今の伝習農場を創られた。私も大型トラクターを習いに行ったことがあります。免許は桧原の試験場で取りましたが。私たち農業関係に携わった者は、宗像塾出身とだけ言っていました。

入部の中通りにまだ高齢で元気にしてある樋口文城さん、なくなれましたが長峰の樋口國夫さん、どちらも素晴らしい息子さんが一生懸命やっております。宗像塾は腕はいいけど農士学校はつまらん、まだまだという話を聞きよりました。私も負けちゃいかんと思っておりました。伝習農場は私学学校令でつくられたのです。

（問）抜き穂というのがあります。全国からいい稲だけ選んで、一升、大嘗祭に皇室に提供する。皇室では抜き穂を、虫眼鏡でひとつひとつ見て、いい粳の苗を植えて、実ったお米を各地に配布するのです。皇室からの種をいただいてできたお米という形にするんです。悠紀斎田、主基斎田と並行してやられたんですよね。こっちにも、そういうのがあったのかな、と思って、ご存じですか？

（答）それは、初めて聞きました。

<結び>

カッパ塾のアドバイザーでいらっしゃいます施先生最後にご感想などお願いできますか？ 先生は比較社会文化研究院、政治哲学が専門でいらっしゃるということで、アドバイザーをお願いしております。

（施）農士学校は聞いたことがあったのですが、私も生まれたのは七隈なのですが、脇山の身近な所にあったと伺いまして、お話を聞きながら色々と思いをはせておりました。いまTPPの問題とかで、農業の問題を憂えているというか、生活の足場がなくなってしまうような感じがして、不安に思っているところでしたが。今日のお話を聞きまして、またいろいろ、さらに勉強したいと思いました。今日はどうもありがとうございました。（拍手）